

地質61 大隅半島の石

地質担当 若松 斉昭

当館では、令和6年9月28日（土）から11月24日（日）まで蔵出し企画展「大隅半島」を開催しています。常設展示では公開していない、大隅半島に関する標本を多数展示し、大隅半島の魅力について解説しています。地質分野からは、大隅半島を構成する代表的な岩石を展示して解説しています。今回の自然だよりでは、そのうちのいくつかを紹介し

大隅石（Osumilite）

大隅半島の石といえば、まずなんといっても「大隅石（Osumilite）」でしょう。世界では5,000種を超える鉱物が確認されています。日本では130種あまりが発見されていますが、そのうち「大隅石」は7番目に認定された鉱物で、1956年に新種鉱物として記載されました。大隅半島の垂水市早崎（咲花平）で発見されたことから「大隅石（Osumilite）」の名前が付けられました。大隅石は、始良カルデラを挟んで反対側の、始良市と霧島市の境にある黒川岬付近の流紋岩にも含まれることが知られています。このことは、始良カルデラの巨大噴火のメカニズムを解明するためにも重要だと考えられています。当館3階に常設展示されている標本は、鹿児島県の天然記念物に指定されています。



大隅石（Osumilite）

荒平石

大隅半島には、始良カルデラや阿多カルデラ起源の火砕流堆積物が広く分布しています。なかでも半島中央部の笠之原台地は、始良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物からなるシラス台地の代表例として、中学校地理の教科書にも取り上げられています。火砕流堆

積物は、堆積した時の自身の熱と重みで固まって、溶結凝灰岩という岩石になることがあります。しかし笠之原台地を形作る入戸火砕流堆積物はほとんど溶結しておらず、水はけが良いため稲作には不向きでした。そこで昔の人々はサツマイモや大豆、アブラナといった乾燥に強い作物に頼って生活していました。1967年（昭和42年）に高隈ダムが完成して大規模な灌漑が行われるようになってからは野菜や飼料作物が栽培されるようになり、鹿児島県内有数の畑作・畜産地帯となりました。

一方で、半島南部には阿多カルデラから噴出した火砕流堆積物が分布しており、多くの部分が溶結凝灰岩となっています。火砕流堆積物は低いところを埋めるように堆積するため平坦な地形を形成しますが、その後自身の重みによる圧縮で、堆積前に川が流れていたような谷地形に再び川が形成されます。溶結凝灰岩の河床は広く平坦であることが多く、錦江町の雄川上流部は、「花瀬の石畳」として県の天然記念物に指定されています。また、川の下流では大きな滝も形成され、「雄川の滝」は大河ドラマのオープニング映像にも使われて、人気の観光地となっています。この阿多火砕流堆積物の溶結凝灰岩は、古くから石材として使われてきました。主な採石地の名前から「荒平石」と呼ばれており、特徴的な赤っぽい色をしています。大隅半島南部の道路を走っていると、旧家の石垣や蔵にこの石が使われていて、その赤っぽい色がこの地域独特の景観を作っています。



溶結凝灰岩（荒平石）

蔵出し企画展「大隅半島」では、このほかにも付加体堆積物の砂岩や輝緑岩、花こう岩などを展示しています。ぜひご来場ください。